

チヨーサーと Affected Modesty のトポス

柴 田 竹 夫

Chaucer and the Affected Modesty Topos

Takeo Shibata

<resume>

Geoffrey Chaucer often refers to the affected modesty topos which is a rhetorical device traced back to M. T. Cicero (106–43 B.C.). Chaucer's affected modesty topos holds three divisions: (1) on "wit," (2) on "rhyme" and (3) on "rhetoric." The affected modesty topos reveals a moderate excuse with humiliation for the talent, rhyme and rhetoric by the narrator to appease the listener (the reader).

The affected modesty topos of Chaucer indicates that Chaucer is acutely conscious of "Englyssh" with an awareness of language in the late Medieval Ages, struggling with the foreign poets such as in French and Latin.

<key words>

1. Geoffrey Chaucer
2. affected modesty topos
3. Medieval English Literature
4. rhetoric
5. Middle English

E. R. クルツィウス (Ernst Robert Curtius, 1814—1896) は、その著『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第5章「トポスとトポス論」において、歴史的トポスとしての Affected Modesty (装われた謙遜) のトポス (topos)¹⁾ に言及している。²⁾ ここで Affected Modesty とは、弁論家が聴衆の気持ちを好意的で、熱心で、従順なものにするために、聴衆に対し自ら進んで示す控え目な態度のことを言う。

トポスとしての Affected Modesty は、キケロ (Marcus Tullius Cicero, 106—43 B.C.) にまでさかのぼり、キケロは、弁論家が見せる卑下と謙遜の有効性を説く。弁論家が「自己の無力さ」を釈明したり、「準備の不十分さ」を表明したりすることは、法廷の弁護に由来するが、これは、法廷より文学のジャンルにまたがって使われることになり、「謙遜の定句」は、中世のラテン文学と俗語 (自国語) 文学に伝わり、作家は、「自己の力量不足」をあからさまにし、「自己の無教養で粗野な言葉」を嘆いてみせることになると、クルツィウスは言う。³⁾

キケロにまでさかのぼるこの Affected Modesty のトポスは、ジェフリー・チャーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?—1400) においても現われる。⁴⁾ 本稿では、チャーサーにおけるこのトポスについて考察したい。チャーサーにおいてこのトポスは、“wit” に関するもの、“rhyme” に関するもの、“rhetoric” に関するものの三つに分けられる。

まずは “wit” に関するものから始める。チャーサーにおいて4ヶ所見られる。

1) 『カンタベリー物語』 (*The Canterbury Tales*) のいわゆる「総序の歌」 (*The General Prologue*) の語り手は、ロンドンの南、サザークにある The

Tabard と呼ばれる旅籠に四月初旬のある夜集まって、皆でカンタベリー詣での巡礼に出かけることになった様々な階級の巡礼者の一人としてのチャーサーである。巡礼仲間がどの様にしてこの旅籠に集まったか、その次第を語り終えた後、彼らがその夜どの様に振舞ったか、そして旅のことや巡礼を終えた後のことを語り始める前に、巡礼である語り手チャーサーは、聴衆（読者）に対し次の様な言いわけの言葉を発する。⁵⁾

Also I prey yow to foryeve it me,
Al have I nat set folk in hir degree
Heere in this tale, as that they sholde stonde.
My wit is short, ye may wel understonde.

(I [A] 743—6)

ここで“*My wit is short*”という時の“*wit*”は、*skill, talent*（力量）の意味（*A Chaucer Glossary*）（Cf. *OED* 5; 5. b.）で、カンタベリー詣での巡礼たちの語る話は、必ずしも階級の上から順に並べられてはいないことに對し語り手は、言いわけをするが、これは、カンタベリー巡礼団が、様々な階級出身者の集まりであり、階級に応じてしかるべき順に並べていることを聴衆が当然期待することをチャーサーは認識した上でのことである（『カンタベリー物語』における話の順序は、実際には階級に配慮したものになっているが）。しかるにチャーサーは、階級に応じてしかるべき順に置くことよりは、宿の亭主の発案に基づく語り手間の物語合戦など物語の語りの効果をねらった詩人としての立場をまず第一にしている。“*wit*”が足りないのではなく、自らの“*wit*”への認識をもった、語りの上での言いわけなのである。“*My wit is short*”と言うことにより、詩人への期待に対する裏切りに反応する聴衆の気持ちを和らげるねらいを持っている。

2) “*wit*”に関する2例目は、1例目の直前の部分（I [A] 725—9）である。

But first I pray yow, of youre curteisye,
That ye n'arete it nat my vileynye,
Thogh that I pleynty speke in this mateere,
To telle yow hir wordes and hir cheere,
Ne thogh I speke hir wordes proprely

一語一語ありのままに言うことにより、登場人物の本当らしさを出し、人物の性格を作り上げること⁶⁾を念頭に置いたチャーサーの詩人としての話の技巧⁷⁾である。1例目の“My wit is short”という時と同様、自らの“wit”に対する言いわけである。それは“wordes”の問題である。

3) “wit”に関する3例目は *The Book of the Duchess* (895—901) にみる。

“But which a visage had she thertoo!
Allas, myn herte ys wonder woo
That I ne kan discryven hyt!
Me lakketh both Englyssh and wit
For to undo hyt at the fulle;
And eke my spirites be so dulle
So gret a thyng for to devyse.

ここで語り手チャーサーは、貴婦人のすばらしい容貌を描くことができるに十分な英語 (Englysh) も力量 (wit) も欠いていること、そして大切なことを述べるには彼の精神が鈍っていることを嘆いてみせるが、これは貴婦人の美しさを聴衆に印象付けるための修辭的用法である。語り手は本当に自らの“wit” (力量) が欠けているとの認識によってではなく、修辭として、女の美しさは言葉で言いあらわせない程であることを訴える。語り手自らの“wit”への言及、自らの“wit”への言いわけを通して聴衆の好意を得た上で女の美しさを極立たせるという効果を語り手はねらう。

4] “wit” に関する 4 例目は, *Troilus and Criseyde* (3.1310—11) にみる。

Of hire delit or joies oon the leeste
Were impossible to *my wit* to seye;

トロイルスとクリセイデの二人が結ばれた時の二人の喜びの大きさを語るに、語り手の“wit”を持ち出し、言いわけすることにより、その喜びの大きさがいかばかりであったかを聴衆に強く印象づける効果を持つ。

ここまで“wit”に関する Affected Modesty のトポスの 4 例をみてきたわけであるが、語りの効果をねらった話の修辞の技巧としてあると言える。

3

Affected Modesty のトポスの 2 例目は, “rhyme” に関するものである。チョーサーにおいて 9 例みられる。

1] “rhyme” に関する 1 例目は, *The Knight’s Tale* (I [A] 1459—60) にみる。

Who koude *ryme in Englyssh* proprely
His martirdom? For sothe it am nat I

L. D. Benson 版は、この 2 行について次の様な注⁸⁾をつけている。

Chaucer frequently refers to his lack of Englyssh: cf. MLT II. 778—79; Sq T V. 37—38; BD 898—99; LGW 66—67; these contexts are highly rhetorical and the references may be merely variants on *the “modesty”* or *“inexpressibility” topos* (cf. GP I. 746n.) but they may also reflect a concern about *the state of literary English*; cf. Ven 80 and

introductory note to Venus.

2行にまたがるチャウサーの“lack of Englyssh”への言及において、チャウサーのAffected Modestyのトポスは、“the state of literary English”へのチャウサーの関心を明らかにしている。これは“lack of Englyssh”によって詩作における rhyme がうまくできないことへの（語り手の聴衆に対する）言いわけであり、チャウサーの時代の英語⁹⁾の置かれた状況を強く意識した上での英語に対するチャウサーの認識が強く伺える。

2) “rhyme”に関する2例目は、*The Squire's Tale* (35—37) にみる。語り手 the Squire は自らの英語について次の様に言う。

It lyth nat in my tonge, n'yn my konnyng;

I dar nat undertake so heigh a thyng.

Myn Englissh eek is insufficient.

ここで“insufficient”という語は、*MED*において、“Of things: lacking in account or quality; inadequate, defective; of a sinew: weak.” (adj. [b]) とある。初出例は CT. Sq F.37 (c 1395) であり、*The Summoner's Tale* (1960) と共に2例のみ¹⁰⁾ある。チャウサーは、語り手 the Squire 自ら婦人の美しさをあらわすのに英語の力量不足を言いわけとして、語り手自らに“Myn Englissh is insufficient.”と語らせるが、ラテン語やフランス語が英語よりも言語的にも文化的にも優勢であり、英語が不安定で劣勢であった当時の状況を当然踏まえた上でのことである。¹¹⁾ R. W. V. Elliott. は次の様に指摘する。¹²⁾

But beneath the modest disclaimers of his characters lurks Chaucer's own persistent tendency to belittle his own art and his competence as a poet. Undoubtedly, this pose was a familiar medieval rhetorical

mode which Chaucer readily exploited for ironic purposes, but it had some factual basis in the uncertainties of a rapidly developing language which faced every poet writing in the last thirty years of the fourteenth century. The narrator's comment in *Troilus and Criseyde*—

For myn wordes, heere and every part,
I speke hem alle under correccioun
Of yow that felyng han in loves art,

(*Tr* III, 1331—3)

—is a characteristic example of rhetorical *diminutio*,¹³⁾ (=self-disparagement) but it has the ring of truth in it.

3) “rhyme” に関する3例目は, *The Man of Law's Tale* (II.778—79) にみる。

O Donegild, I ne have noon *English* digne
Unto thy malice and thy tirannye!

この箇所は、原典にはなく、チョーサーの付加の箇所である。これは語り手 the Man of Law の “lack of Englyssh” に対する Affected Modesty のトposであるが、Donegild の malice をいうにふさわしい英語を知らないとは、その malice のひどさを聴衆に訴え、理解を求めてのことである。

4) “rhyme” に関する4例目は, *The Book of the Duchess* (895—901) にみる。この箇所は、“wit” の3例目でも取り上げたところであるが、“lack of Englissh” の例でもある。女性の美しさを述べる言葉（英語）を知らないことへの言いわけを語り手チョーサーはする。しかし、それは、“wit” の時と同様、聴衆に対する女性の美しさの強調の修辞としてである。

5] “rhyme”に関する5例目は, *The Legend of Good Women* (66—67) にみる。

Allas, that I ne had *Englissh*, *ryme* or *prose*,¹⁴⁾
Suffisant this flour to preyse aryght!

語り手チャーサーは, “lack of Englissh” を自覚し, 詩作の上での “ryme” の足りなさ, “prose” を書く力量不足の言いわけをする。

“rhyme” に関する(1)～(5)例は, 結局 “lack of Englissh” への言いわけであるが, 言いわけを言わなければならない劣勢な状況に当時の英語はあったことを示している。

6] “rhyme” に関する6例目は, *The Complaint of Venus* (79—82) にみる。

And eke to me it ys a gret penaunce,
Syth *rym* in *Englissh* hath such skarsete,
To folowe word by word the curiosite
Of Graunson, flour of hem that make in France.

L. D. Benson 版のこの箇所に対する注は, 次の様に指摘する¹⁵⁾。

Chaucer’s oft quoted remark on the scarcity of rhymes in English (80) is true; that English has fewer rhymes than French is incontestable. . . . Perhaps the apology for *the scarsete of rhyme in English* is at once a conventional use of the topos of “affected modesty” (see G P I. 746.) and a sly way of calling attention to *the technical virtuosity of his poem*.

“rhyme” に関する(1)～(5)例において “lack of Englissh” を吟味したが、『カンタベリー物語』中の語り手チャウサーそして *The Squire’s Tale*, *The Man of Law’s Tale*, *The Book of the Duchess*, *The Legend of Good Women* の各々の語り手の英語の力量不足の認識、自覚は、つまるところ *The Complaint of Venus* (79—82) における “skarsete of rym in Englissh” の嘆き、言いわけにみる詩人チャウサー自らの力量不足の認識にもとづくものであることは明らかである。

“rhyme” に関する(1)～(5)例の “lack of Englissh” の言いわけと自覚からは、各語り手による語りの強調の修辭的効果をねらった英語に対する言いわけ、そして当時の英語の置かれていたきわめて不安定な状況がみえる。そして6例目の “a gret penaunce” (79) という程の “skarsete of rym in Englissh” からは、その様な不安定な英語の状況下において、詩人チャウサーは、“skarsete” を嘆きつつ、それこそ “word by word” (81) にフランス語を追いかけて英語に翻訳¹⁶⁾ するという挑戦¹⁷⁾ を続ける詩人としての自負心、そして tradition, standard English への強い指向、意識が伺える。

7) “rhyme” の7例目は、*The Complaint of Venus* (73—78) である。

Princes, receyveth this compleynt in gre,
Unto your excelent benignite,
Direct after *my litel suffisaunce*.
For elde, that in my spirit dulleth me,
Hath of *endyting* (=composition) *al the subtilte*
Wel nygh bereft out my remembraunce.

老齡により、記憶から “al the subtilte of endyting”¹⁸⁾ を奪われた、これはすなわち若い頃はそれを有していたという自負の現れである。Benson版の注が指摘する “the technical virtuosity of his poem” とは、詩人チャウサーの詩作における英語の “rhyme” の必要性、重要性の認識にもとづいたものである¹⁹⁾。

8] “rhyme” に関する 8 例目は、*The Second Nun's Prologue* (VIII [G] 78—84) である。

Yet preye I yow that reden that I write,
Foryeve me that I do no diligence
This ilke storie *subtilly to endite*,
For bothe have I the wordes and sentence
Of hym that at the seintes reverence
The storie wroot, and folwen hire legende,
And pray yow that ye wole my werk amende.

the Second Nun のこの語りからも “subtilly to endite” へのチョーサーの強い意識が伺える。

ここでチョーサーの時代の英語が置かれていた状況を、また、英語とラテン語、フランス語の関係を押さえておきたい。チョーサーの英語は、14世紀末のロンドン方言²⁰⁾であったが、チョーサーはどのような言語環境の下にいたのであろうか。

Baugh & Cable の *A History of the English Language* は次の様に言う。²¹⁾

One of the striking characteristics of Middle English is its great variety in the different parts of English. This variety was not confined to the forms of the spoken language, as it is to a great extent today, appears equally in the written literature. In the absence of any recognized literary standard before the close of the period, writers naturally wrote in the dialect of that part of the country to which they belonged. And they did so not through any lack of awareness of the diversity that existed.

チャーサーは、発音²²⁾と綴り字の多様性についての認識を *Troilus and Criseyde* (V, 1793—98) において次の様に現わす。

And for ther is so gret diversite
In English and in writyng of oure tonge,
So prey I God that non myswrite the,
Ne the mys metre for defaute of tonge;
And red wherso thow be, or elles songe,
That thow be understonde, God I biseche!

この様に当時の英語の発音と綴り字の多様性、方言の多様性の中にチャーサーはいたわけである。

1066年に William the Conqueror (1027—87) ひきいるノルマン人はイギリスを征服し、続く150年間は、イギリスの上層階級にとってフランス語を使うことは自然なことであり、必要なことでもあったが、13～14世紀になるとフランス語を維持することは次第に不自然となり、終に14世紀には英語は再びあらゆる階層に行きわたるようになる。²³⁾

こうしたことを当時の文献から引いてみると、William of Nassyngton の *Speculum Vitae (Mirror of Life)* (61—78) (c. 1325) は次の様に言う。²⁴⁾

In English tonge I shal 3ow telle,
3if 3e wyth me so longe wil dwelle.
No Latyn wil I speke no waste,
But English, pat men vse mast,
Dat can eche man vnderstonde,
Dat is born in Ingelande;
For pat langage is most chewyd,
Os wel among lered (=learned) os lewyd (=unlearned).

Latin, as I trowe, can nane
 But po, pat Laueth it in scole tane,
 And somme can Frensche and no Latyn,
 Dat vsed han cowrt and dwellen perein,
 And somme can of Latyn a party,
 Dat can of Frensche but febly;
 And somme vnderstonde wel Englisch,
 Dat can noper Latyn nor Frankys.
 Bope lered and lewed, olde and 3onge (=young),
Alle vnderstonden english tonge.

つまりチョーサーの時代は、老いも若きも、学のある人もない人も、皆英語がわかる時代だったのである。ちなみに English nationalism は Edward III (1312—77) 治下1340年代に起こったというし、²⁵⁾ チョーサーがよく知る官廷では、廷臣たちは書くのは普通フランス語、読むのもフランス語が多かったとしても、話すのはまず間違いなく英語であった。²⁶⁾ Edward III は英語とフランス語のバイリンガルで、Richard II (1367—1400, 在位1377—99) は、母語はフランス語であるが、Wat Tyler の反乱 (1381) の時には国民に英語で呼びかけている。²⁷⁾ この様にフランス語に比べても、英語は次第に劣勢な立場から脱していく。

先に “lack of Englyssh” の考察に際し、当時の英語の不安定な状況を指摘したが、次にその状況を N. F. Blake の *The English Language in Medieval Literature* を手がかりに更に探してみる。

N. F. Blake は、Middle English に関して次の2点を指摘する。一つは the literary background からみた “absence of tradition” (a lack of tradition)²⁸⁾ であり、今一つは the linguistic background からみた “absence of a standard language” (a lack of precision)²⁹⁾ である。

まず “absence of tradition” から始める。N. F. Blake は次の様に言う。³⁰⁾

To Chaucer English works were insufficiently authoritative or fashionable to be worth quoting or alluding to.

チョーサーは、Granson のようなフランスの作家、Petrarch のようなイタリアの作家の名に言及するが、“Moral” Gower 以外にはイギリスの作家に言及することはない。英語の著作は authoritative とみなされていなかったからである。

次に “absence of a standard language” について N. F. Blake は次の様に言う。³¹⁾

The most important feature of the English language, the medieval period is the absence of a universally accepted standard, for a standard language is a taught language.

当時の英語は様々な地方方言で書かれていて、綴り字にしろ、用法、統語法にしろいかなる基準となるようなものはなかったわけである。そして “a standard language” つまり “a taught language” とは英語ではなくラテン語であり、学校ではラテン語の文法が教えられており、³²⁾ 他方英語の文法は正式に教えられておらず、従って “correct English” という概念そのものが当時なかったわけである。³³⁾

この様な状況下にあった英語の作家たちは、従って次の様な有様であった。³⁴⁾

Writers of English suffered from *an inferiority complex in regard to both Latin and French*, an inferiority engendered by its *comparative poverty and instability*.

フランス語、ラテン語に比べて rhyme が乏しく、洗練されておらず、安定性に欠ける英語は、洗練され、豊かにされる必要に迫られていた。

それでは当時フランス語、ラテン語の文化的、社会的な位置付けはどのようなものであったのか。ラテン語は、the Bible, the Church's liturgy 及び the intellectual language of the fathers の言語であった。³⁵⁾ またラテン語は、1066年以降 the language of bureaucracy であり、フランス語は the language of parliament and the law であり、³⁶⁾ 14世紀末まで the language and culture of prestige であった。³⁷⁾ ラテン語は英語に比べて stability と regularity を持ち、ラテン語とフランス語は英語に比べて dignity と status を持つ。³⁸⁾ またラテン語の文語は古典時代に標準化され、フランス語の文語は13世紀までには form において標準化され始める。結局1400年までには英語は “the colloquial language” として、それに対してラテン語、フランス語は “official written language” としての社会的な位置を占めるようになる。³⁹⁾

9] ここで “rhyme” に関するトポスの考察に戻る。9例目は、*The Merchant's Tale* (IV [E] 1736—7) にみる。

To smal is both thy penne, and eek thy tonge,
For to descryven of this mariage.

語り手は、老齡の騎士が若き乙女との結婚で得る喜びが、“penne”（書き言葉）においても“tonge”（話し言葉）においても現すことができないほどの大きなものであることを言おうとするが、“penne”と“tonge”が“To smal”とは勿論、アイロニカルな Affected Modesty のトポスである。しかし当時の英語の “scarsete of rhyme” や自らの “wit” を考えると、“penne”と“tonge”の問題は、詩人チャーサーには深刻な問題であったことは確かである。そしてこの時、チャーサーは、“rhyme”に関するトポスの(1)～(7)例の考察からわかるように、時代の要請に基づいて、詩人としての自負心、“subtilly to endite”の強い自覚を抱いて、英語の tradition, standard への指向を強く意識する。

最後に “rhetoric” に関する Affected Modesty のトポスの吟味に入る。

1) 3例あって、1例目は、*The Franklin's Prologue* (V. 716—28) にみる。

But, sires, by cause I am a burel man,
 At my bigynnyng first I yow biseche,
 Have me excused of my rude speche.
 I lerned nevere *rethorik*, certeyn;
 Thyng that I speke, it moot be bare and pleyn.
 I slepe nevere on the Mount of Pernaso,
 Ne lerned Marcus Tullius Scithero (=Cicero).
Colours ne knowe I none, withouten drede,
 But swiche *colours* as growen in the mede,
 Or elles swiche as men dye or peynte.
Colours of rethoryk been to me queynte;
 My spirit feeleth noght of swich mateere.
 But if yow list, my tale shul ye heere.

この箇所において、自身を “a burel man (= a maker or seller of burel)” と呼ぶ語り手 the Franklin は、a rhetorical device である *diminutio* を使って、Affected Modesty を行なう。⁴⁰⁾ そのねらいは、“colours of rethoryk (= rhetorical ornaments)” (修辭的文飾) にまつわる *diminutio* を使って、自らの話に対する “rhetoric” の力量不足への言いわけである。

Stephen Knight は、この箇所の分析において、次の様に指摘する。“The style is rather jerky: the single line in the unit here and there is no *enjambement*.” であり、“the overall impression of the passage as one with a badly broken jerky rhythm” と彼はみる。⁴¹⁾ the Franklin は rhetorical

ornament としての “colours” を言っ、続いて「色」としての “colours” (25) に触れる。そして再び rhetorical ornament を言う。しかし彼はやはり “colours of rethoryk” を知らない “a burel man” である姿 (“a burel man” でないことをめざしながら、結局は “a burel man” である自身を見せるというアイロニカルな姿) を露呈する。

2] “rhetoric” に関する 2 例目は、*The Squire’s Tale* (V [F] 37—41) にみる。これは ‘rhyme’ に関する 2 例目の続きの箇所である。

Myn English eek is insufficient.

It mooste been a rethor excellent

That koude his colours longynge for that art,

If he sholde hire discryven every part.

I am noon swich, I moot speke as I kan

この箇所は、“colours of rethoryk” の強い意識を持った “rethor” への言及であり、語り手 the Squire の rhetoric の力量不足への言いわけである。

3] “rhetoric” の 3 例目は、*The Squire’s Tale* (V [F] 105—6) にみる。

Al be that I kan nat sowne his stile,

Ne kan nat clymben ever so heigh a style,

この箇所は、語り手 the Squire の rhetoric の力量不足への言いわけである。

14, 15世紀において、“rhetoric” という英語の言葉は、prose にしろ verse にしろ、一般に “style” を意味していた。⁴²⁾ “style” に関して C. Muscatine は次の様に指摘する。⁴³⁾

Rhetoricians, from classical times, have divided styles into the ‘high,’ the “middle,” and the “low,” according to varying principles.

“rhetoric”に関するトポスの3例からは、『カンタベリー物語』の登場人物である語り手の rhetoric を意識した上での、その力量不足への言いわけが聞こえてくるが、これは勿論詩人チョーサー自身の詩作における rhetoric⁴⁴⁾の重要性の認識に基づいたものである。例えば、Robert O. Payne の “Chaucer’s Realization of Himself as Rhetor”⁴⁵⁾をみれば、それがわかる。なにしろ rhetoric=poetica の時代であった。⁴⁶⁾

しかしながらチョーサーは、rhetoric を強く意識した詩人であるが、単に技巧としての rhetoric の詩人では勿論ない。J. M. Manly も指摘する様に、⁴⁷⁾チョーサーは詩人としての “imaginative construction” を第一に探求した詩人であった。

5

“wit”, “rhyme”そして rhetoric”に関するチョーサーの Affected Modesty のトポスからは、『カンタベリー物語』の登場人物であり、語り手としての人物の性格、力量という、「物語」の点からみた語りの効果のねらい、そして、“makere”⁴⁸⁾としての自覚、自負心を持った詩人チョーサーの姿が見えてくる。

チョーサーの Affected Modesty のトポスにおいて、語り手には、話の語り手と語り手チョーサー及び詩人チョーサーの三者があって、語り手の謙遜にみるアイロニカルな面は、例えば本当に力量不足によるものであるし、又ある謙遜の場合には、力量不足と言いつつ、実際は力量を有するチョーサーの “subtilly to endite” の強い自覚を持った詩人であるという自負心の現れである。R. W. V. Elliott はこう言う。⁴⁹⁾

The fact is indisputable, however, that Chaucer was acutely conscious of “English” and revealed in many passing comments an awareness of language and style unequalled among English poets until Shakespeare.

詩人チョーサーは、英語に対して鋭い言語感覚を抱いている。⁵⁰⁾

チョーサーの時代、英語と社会に急激に様々な変化が起こり、人々は常にそれへの適応に迫られていた。その時鋭い言語感覚を持った詩人チョーサーは、自らのため、英語のためにラテンやフランスといった外国の詩人たちと格闘し続けていたわけである。⁵¹⁾

注

- 1) “A traditional motif or theme (in a literary composition); a rhetorical commonplace, a literary composition or formula.” (OED) (初出1948)
- 2) E. R. クルツィウス著、南大路振一、岸本通夫、中村善也訳『ヨーロッパ文学とラテン中世』(東京:みすず書房, 1971年), 117~121頁。Ernst Robert Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, trans, by Willard R. Trask (Princeton: Princeton U. P., 1973)
- 3) 前掲書, 118頁。E. R. Curtius, p.83.
- 4) Ralph W. V. Elliott, *Chaucer's English* (London: Andre Deutsch, 1974), p.67.
- 5) チョーサーの引用はすべて Larry D. Benson (ed), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987) に依る。引用文中括弧内の数字は行数を表す。引用文中イタリック体は筆者自身のものを表す。以下に本稿で取り上げたチョーサーの作品の制作年のリストをあげておく。
 - 1) The General Prologue: probably in the late 1380s (L. D. Benson, p.797)
 - 2) *The Book of the Duchess*: 1369-70 (Robert Dudley French, *A Chaucer Handbook* [New York: Appleton Century Crofts, 1947], p.86)
 - 3) *Troilus and Criseyde*: 1381-7 (French, p.189); 1385 (Benson, p.1020)
 - 4) *The Knight's Tale*: about 1386 (Helen Cooper, *Oxford Guides to Chaucer: The Canterbury Tales* [Oxford: Clarendon Press, 1989], p.61)
 - 5) *The Squire's Tale*: an early work/the 1370s or early 1380s (*Oxford Guides to Chaucer*, p.217)
 - 6) *The Man of Law's Tale*: from about 1390 to 1394-5 (Benson, p.857); about 1390 (*Oxford Guides to Chaucer*, p.125)
 - 7) *The Legend of Good Women*: 1386-95 (French, p.126)

- 8] *The Complaint of Venus*: about 1385 (Benson, p. 108); 1391-94 (French, p. 112)
- 9] *The Second Nun's Prologue*: before 1386—7 (Benson, p. 942; *Oxford Guides to Chaucer*, p. 358)
- 10] *The Merchant's Tale*: unknown
- 11] *The Franklin's Prologue*: the middle 1390s (Benson, p. 895)
- 6) Cf. "Chaucer shares with the Pardoner and Aristotle the perception that every effective speech must to some degree invent (simulate) the character of its speaker; he shares with the Parson and Augustine the conviction that moral disaster for the speaker lies that way." (James J. Murphy [ed.], *Medieval Eloquence: Studies in the Theory and Practice of Medieval Rhetoric* [Berkeley: Univ. of California Press, 1978], p. 281)
- 7) Cf. R. W. V. Elliott, p. 369.
- 8) L. D. Benson, p. 832, note to ll. 1459—60.
- 9) Norman Blake (ed.), *The Cambridge History of the English Language, Vol. II 1066—1476* (Cambridge: Cambridge U. P., 1992), p. 1.
- 10) Cf. R. W. V. Elliott, p. 19.
- 11) Norman Blake, pp. 5—6. R. H. Robbinsは、*Chaucer*を、Father of English Poetry とみると同時に、Poète Français とみる (Rossell Hope Robbins, "Geoffroi Chaucier, Poète Français, Father of English Poetry," *The Chaucer Review* 13 [1978], 93—115)。
- 12) R. W. V. Elliott, p. 66.
- 13) "a figure of thought by Geoffrey of Vinsauf" (J. W. H. Atkins, *English Literary Criticism: The Medieval Phase* [London: Methuen, 1952], p. 203)
- 14) Cf. "Translation from Latin or French had remained a regular feature of English prose in the Middle English period." (Norman Blake, p. 528) "the progress of English prose owes disappointingly little to Chaucer." (Derek Brewer [ed.] *Writers and their Background: Geoffrey Chaucer* [Athens: Ohio U. P. 1975], p. 62) "His prose treatises—*Boece*, *Melibee*, the *Treatise on the Astrolabe*, and possibly the *Equatorie of the Planetis*—represent some of the first attempts in English to write technical exposition of the sort that would be polished in Chancery writs and expository essays throughout the next century." (Thomas J. Heffernan [ed.] *The*

Popular Literature of Medieval England (Knoxville: The Univ. of Tennessee Press, 1985), p.249)

15) L. D. Benson, p.1081.

16) Cf. "Translation in its turn encouraged writers to think about the respective merits of each language, and faults which were detected in English had remedies applied which were taken from other languages particularly Latin and French." (Norman Blake, p.517) "Latin and French, the two languages principally drawn on for translation" (N. F. Blake, *The English Language in Medieval Literature* (London: Methuen, 1977), p.53) "virtually everything Chaucer wrote throughout his career is a translation or adaptation from French." (John H. Fisher, *The Importance of Chaucer* (Carbondale: Southern Illinois U. P., 1992), p.28) "Chaucer's audacious innovation was to compose in English, for this Anglo-Norman audience, lyrics, romances, and pious tales for which French was considered the only appropriate language." (John H. Fisher, *The Emergence of Standard English* (Lexington: The Univ. Press of Kentucky, 1996), p.101) "when Chaucer first began to write English verse after the French fashion, he was very sensitive to the distinctions between the languages and attempted consciously or subconsciously to use as purely native a vocabulary as possible. This linguistic self-consciousness limited the conceptual scope and depth of his early poetry. As he progressed, his poetry grew more complex, and the complexity was made possible by reduction of his linguistic self-consciousness and the use of more and more words from the administrative, learned, and cultural French with which both he and his audience were so familiar." (*Ibid.*, p.107)

17) "For Chaucer the artist there lay in this act of exploration the challenge which enabled him so to fashion his language that it became the vehicle of great poetry, and to "ascertain" in Swift's sense and give performance, as he puts it in *Boece* III, pr. II, 190—1, to 'the thinges that what whilom semeden uncerteyn to me'." (R. W. V. Elliott, p.66)

18) Cf. Robert O. Payne, *The Key of Remembrance: A Study of Chaucer's Poetics* (Westport: Greenwood Press, 1977), pp.83—4.

- 19) チョーサーの時代の rhyme の重要性について, Norman Davis はこう指摘する。 “Chaucer’s works in verse are all obviously intended to rhyme.” (Derek Brewer, pp.63—4)
- 20) Albert C. Baugh & Thomas Cable, *A History of the English Language*, 4th ed. (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall, 1993), p.412.
- 21) チョーサーは, the dialect of upper-class London, the *Pearl* poet は the dialect of Lancashire, そして Langland は a south midland melange である (*Importance of Chaucer*, p.11) Cf. “Chaucer did not ‘create’ the language in which he wrote. It was being created by the intermingled French and English business class emerging in London at the end of the fourteenth century.” (*Ibid.*, p.11)
- 22) “the pronunciation of English among the educated classes was not standardized until the eighteenth century.” (*The Emergence of Standard English*, p. 40) “there was no standardization of grammatical forms, punctuation lacked precision, and words remained less clearly defined than now.” (N. F. Blake, p.168)
- 23) Baugh & Cable, p.124. Cf. “English was officially permitted as the language of the law courts in 1362. In the following year the declaration of the summons opening Parliament was for the first time made in English. The earliest English proclamation of the city of London was issued in 1384. The earliest known will in English is of 1387. But English was not commonly used in legal, civil, and official documents until well into the fifteenth century.” (Charles Muscatine, *Chaucer and the French Tradition: A Study in Style and Meaning* [Berkeley: Univ. of California Press, 1973], p.251, note to 1.5) R. H. Robbins は次の様に the earliest uses of official English を紹介する(p.96)。
- 1376 oldest private legal instrument
 - 1386 oldest piece of parliamentary English
 - 1387 oldest English wills in the London Court of Probate
 - 1389 oldest returns in English [of guild ordinances]
- The Emergence of Standard English*, p.19. Cf. *Ibid.*, pp.18 ; 37; 40; 45; 60.
- 24) *Ibid.*, pp.141—2.
- 25) *The Emergence of Standard English*, p.18.

- 26) Baugh & Cable, p.142.
- 27) *Ibid.*, p.144.
- 28) N. F. Blake, pp.21—23; Norman Blake, p.168.
- 29) *Ibid.*, pp.40—54; Norman Blake, p.168.
- 30) N. F. Blake, p.22.
- 31) *Ibid.*, p.40.
- 32) *Ibid.*, p.42. Cf. *Ibid.*, p.52. "His [Chaucer's] schooling, we can be sure, was in French and Latin, not in English." (C. Muscatine, p.5)
- 33) N.F. Blake, p.51.
- 34) *Ibid.*, p.43.
- 35) *Ibid.*, pp.25; 51.
- 36) *Ibid.*, p.40.
- 37) *The Importance of Chaucer*, p.6. Cf. *Ibid.*, pp.26—8.
- 38) N. F. Blake, pp.42—3.
- 39) *The Emergence of Standard English*, p.40.
- 40) C. D. Benson, p.896, note to ll. 716—28. Cf. R. W. V. Elliott, pp.67—8.
- 41) Stephen Knight, "Rhetoric and Poetry in the *Franklin's Tale*," *The Chaucer Review* 4 (1970), 17—18.
- 42) Charles Sears Baldwin, "Cicero on Parnassus," *PMLA* 42 (1966), 108. Cf. "it is clear that two features of style which he [Caxton] approved of were the use of many words of French and Latin origin and the employment of rhetorical figures" (N. Blake, p.525)
- 43) C.Muscatine, p.3. Cf. Helen Cooper, p.21.
- 44) Cf. 中世において "rhetoric" はCicero の著作と同意であった (David L. Wagner [ed.] *The Seven Liberal Arts in the Middle Ages* [Bloomington: Indiana U. P. 1983], p.97)。
- 45) James J. Murphy, pp.270—87.
- 46) *Ibid.*, p.272.
- 47) John Matthews Manly, "Chaucer and the Rhetoricians" in Richard J. Schoeck and Jerome Taylor (eds.), *Chaucer Criticism Vol. 1: The Canterbury Tales* (Notre Dame: Univ. of Notre Dame Press, 1975), pp.289—90.
- 48) "Chaucer thought of himself as a 'makere,' an artisan working in words and rhyme, not a philosopher or preacher." (V. A. Kolve, "Chaucer

and the Visual Arts" in *Writers and their Background: Geoffrey Chaucer*, p.316)

49) R. W. V. Elliott, p.65.

50) Cf. "the fourteenth and fifteenth centuries, which in contrast to the earlier period were far more conscious of stylistic considerations and mannered in their use of language," (N. Blake, p.517)

51) "Chaucer gives us of himself struggling with the old poets" (J. J. Murphy, p.273)